キツネ！パラダイス☆ミ

M．A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キツネ！パラダイス☆ミ

【Ｎコード】
Ｎ７２６５Ｅ

【作者名】
Ｍ．Ａ

【あらすじ】
気付いたら死にかけてた俺。そのままだったら死んでたはずなのだが……？なんの因果か狐（雌）になっちゃいました。そんな俺と周りの人との関係を描くハートフルストーリー！（嘘）

第零尾　前半　欠落泥流（前書き）

この話はシリアスにはあまりしません。真面目なのは最初だけです。
＞ｂｒ＜
出てくる人達も最初はシリアスキャラに見せかけてもいずれ壊れます。ではお楽しみいただけたら幸いです。

第零尾　前半　欠落泥流

＞ｂｒ＜
……ここはどこだ？　俺は何故ここにいるんだ？　よし、ここに至るまでの過程を思い出してみることにしよう。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
……何も思い出せん。まあ、今はそんなことは些細なことだ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
それより、見渡す限りあるこの闇色の泥はなんだ？　心なしか俺の身と魂を同時に少しずつ削ってるような気もする。
＞ｂｒ＜
更におかしいのは何故こんな空間に放り出されて俺は恐怖どころか、ほぼなんの感情も浮かべない？　ただあるのはとりとめもない疑問だけだ。
＞ｂｒ＜
俺はこんな冷静な人間だったか？　こんな状況に陥ったらパニックにならない奴はいなさそうなのだが……？
＞ｂｒ＜
ん？　こんな状況で役に立つかどうかは知らないが自分の事について考えようとしたのだが、……見事に何も思い出せん。
＞ｂｒ＜
俺の年齢は？　名前は？　性別は？　俺はオレか？　おれか？　それとも僕？　ぼく？　ボク？　私？　わたし？　ワタシ？
＞ｂｒ＜
俺（　おれ、　オレ　、僕　、ぼく　、ボク　、私　、わたし　、ワタシ　）　は　だ　れ　？

＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ああ、ふと理解した。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　こ　れ　が　俺（　おれ、　オレ　、僕　、ぼく
、ボク　、私　、わたし　、ワタシ　）　の　死
か。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　もうどれだけ時間がたっただろうか？　しかし彼（彼がこうなる前は間違いなく男だったので“彼”と云うことにしておく）は未だ彼のままで“ソコ”にあった。
＞ｂｒ＜
だが、それも時間の問題であろう。このまま何もなければ彼は人が通常そうで在るようにその身も魂も間を繋ぐべき霊魂もこの闇色の泥というべき何もかもを越えた抗い難い何かに洗い流され、転生の準備に入ったことだろう。
＞ｂｒ＜
ここはそういう空間だ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　普通はそうあるべきだったのだ。そう、もはやそれは過去の話。
＞ｂｒ＜
抗い難い何かに抗う為に狐色をした丸い何かが彼に近づきつつあったのだから……。
＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜
　それが彼にとって悲劇になるか、喜劇になるかは分からないけれども……。

第零尾　前半　欠落泥流（後書き）

初めまして。M．Aです。更新間隔は超絶速かったり、速かったり、普通だったり、遅かったり、亀並だったりしますが完結目指して頑張りますのでお付き合い頂いたら幸いです。

第零尾　後半　消失存在

＞ｂｒ＜
……体が暑い？　寒い？　暖かい？　涼しい？　その全てを内包したようなこの感覚は何だ？
＞ｂｒ＜
何かがおかしい。いつの間にか闇色の泥も周りになくなっているんだが。
＞ｂｒ＜
ただ周りには優しいと印象付けるような闇があるだけだ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　一体どうなってるんだ？　俺は俺を失いつつあってそれを受け入れたような記憶もあるんだが…。
＞ｂｒ＜
今、こうして俺が俺として物事を考えられてるのは何故だろうな？
　……うーん、分からん！　分かることと言えば今は俺の事を自覚できることと、もうすぐ目を覚ますであろうということと、目を覚ましたらここの事をほぼ覚えちゃいないだろうってことくらいか？
　ちなみになんでそんな事が分かるのか聞くなよ？　俺だって分からん。
＞ｂｒ＜
あえて投げやりに言うならご都合主義ってやつじゃないか？　まあ、ここが俗に云うあの世とかそれに近いなにかなら不思議な事の一つや二つや三つや四つあっても可笑しくないだろ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ああ、それにしても暇だ。こうしてここにいると寂しくて泣きそうになるな。さっきまではそんな感情も無かったんだがな。

＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
ワタクシハ、イツデモ、キミトトモニイルヨ
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
おや？　なんだか寂しく無くなったぞ？　それに何だかとても親しい誰かと一緒にいるような気分だ。
＞ｂｒ＜
まあ、いいか。寂しくないならそれに越したことはないだろ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
……ん、体の違和感も消えつつあるし、もうすぐで目を覚ますのか。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
ああ、何だか眠くなってきたな。ここで寝たら現世で目を覚ますって仕組みてか。それじゃあ、おやすみなさい……
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
そしてかつて“彼”だったものはこの空間から消え失せた。自分自身の変化に全く気が付かず…。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
こうして“彼”の喜劇的（一方では悲劇的であるかもしれない）な人生が再び始まった。

第零尾　後半　消失存在（後書き）

短くてすいませんでした。しかもＴＳどころか彼の名前も出ていません（彼の名前がまだ決まってないのは秘密）。
＞ｂｒ＜
まあ、次からはもっと長くなる（かもしれない）のでご期待してくれる人が僅かにでもいることを祈って書いて行こうと思います。
＞ｂｒ＜
それではまた。

第一尾　再誕運命

＞ｂｒ＜
　ん、うーん。この寝起き独特の倦怠感が俺は苦手だ。
＞ｂｒ＜
だからいつも、この状態から“後、五分”を実行することにしている。この“後、五分”は実に素晴らしい！
＞ｂｒ＜
あくまで俺の場合はだが、これは目を覚ます為のある種の神聖な儀式のようなもので、この“後、五分”をやるかやらないかでずいぶんと一日の活力が違ってくる。と言うわけで後、五分……
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　って違ーーう！
＞ｂｒ＜
俺は自身の尻尾を左右にふって突っ込みをいれつつ、気を取り直す為に前足を前におもいっきり伸ばして背伸びした。…何かおかしい表現があったような気がするが気のせいだろ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　そんな事よりここは…神社か？　俺が小さかった時からよく遊んでいた稲荷神社だな。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　稲荷神社とはその名の通り狐を祀っている神社で何処にでもあるような神社…のわりには少し広いような気がするが、まあ、いいだろ。
＞ｂｒ＜
この広さにはそれなりの理由があるんだろうな。

＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　と話がずれたな。俺が何故、今ここにいるかそれが重要だ。　毛繕い（・・・）しつつ思い出してみよう。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　　（回想）
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
ａ．ｍ．６：００
＞ｂｒ＜
　　ジリリリリリ
＞ｂｒ＜
　　カチ
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　くっ、もう朝か。と言うわけで後五分…と五分の貴重な睡眠を貪ろうと思ったのだが、と同時に部屋のドアが開いたのだ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「お兄ちゃん、朝だよ！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　うむ、そんな事は分かってる我が妹よ。だがお兄ちゃんは後五分寝ると決めてるのだ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「まあ、いつも五分たったら、ちゃんと起きてるからいいんだけど

ね。」

　そうだろう、そうだろう、というか起きるのがわかっててなぜ毎日起こしに来るんだ？

「お兄ちゃんは、分かってない！　これは未来（みく）だけの特権よ！」

　そ、そうか。そんなに拳を握ってまで言うことか？

まあ、スルーしとこう。なんだかとんでもなく、でかい地雷の気配がする。

じゃあ五分たったら行くから先に行っててくれ。

「むー、スルーされたー。今日も未来は、ないがしろにされるのでした」

　おい、人聞きの悪いことを言うな、ってもういないな。妹は分かってやってるから達が悪い。

まあ、いいだろ。というわけで後五分……

　父よ、母よ、おはよう。

>ｂｒ<
「「おはよう」」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　ん、一日の始まりはやはりおはようから始まるな。
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「！？　お兄ちゃん！　未来には？」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　む！？　今日はご飯に魚そして茄子の味噌汁か！　やっぱ日本人の朝御飯は和食だな。
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「お口は口よ口う。　お兄口ちゃん！」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　いつも思うのだが、父も母も二児の親と思えないくらい若々しいな。なにか若さを保つ秘訣でもあるのか？　是非ともご教授ねがいたいな。
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「おーい。お兄ちゃん？」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　父よ、今日も素敵な私服だな。そのセンス見習いたいものだ。
>ｂｒ<
ところでいつも思うのだが父の職業はなんだ？　気付いたらいつも家にいるんだが。
>ｂｒ<

「いつか、教えてあげられる時が来ますよ。」

　すなわち、今は言えないということか。気になるが父がこう言うと絶対に言わないからな。意外と強情だし。

「それは翔君には言われたくありませんね。翔君の方がいざって時にはとても強情ですからね。」

　そうか？

「おー兄ーちゃーん。フッフッフ、ここまでスルーされたら未来にも考えがあるよ。せーの」

　うお、いきなり抱き付いて来るな！　少し嬉しいじゃないか！

「どうだ、参ったか！」

　参った、参ったからもう止めてくれ口。

「貴方達、じゃれてないで朝御飯、食べちゃいなさいね。」

「「「はいいいーー！！！」」」

　魅力的な素晴らしい笑顔なのに黒いオーラが出てる！？　……我が家の最強は母ということで。

　どうやら妹がもう学校に行くらしい。　部活の関連で俺より早く出ていくみたいだ。

確か妹の部活は占い部だったはずだ。占いというマイナーなジャンルなのに部としてウチの高校に存在できるのには驚きだ。

我が妹ながら一体何を仕出かしたんだか。妹がウチの高校の黒幕的存在だったとしても驚かないな。

　妹は絶滅危惧種のツインテールを装備し、ウチの高校のセーラー服を着ている。我が妹ながらよく似合っているな。

「じゃあ、お兄ちゃん、お父さん、お母さん、いってきま口す！」

おお、行ってらっしゃい。…俺もそろそろ準備するかね。

「あ、そうだ。　お兄ちゃん。」

ん？
＞ｂｒ＜
「今日は、気を付けてね」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
？？？　言いたい事はよく分からないが気を付けるよ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　朝は特に妹の謎の忠告以外は何もなかったな。次は学校での出来事を思い出してみよう。
＞ｂｒ＜
それにしても、尻尾が三本もあると毛繕いが大変だな。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ａｍ８：３０
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　此処は俺の通う県立珠代（たましろ）高校だ。創立２０年で其れほど歴史は深くない。
＞ｂｒ＜
外観は何の特徴もない学校だが、それなりの愛着はある。とそうこうしてる間に我がクラス二年Ｂ組にたどり着いた。
＞ｂｒ＜
　参考迄に言うと妹のクラスは二年Ｆ組だ。すっかり言い忘れていたのだが俺と妹は二卵性の双子なのだ。
＞ｂｒ＜
なぜ、双子なのに妹が俺をお兄ちゃんというかは忘れた！　忘れたんだから、心底どうでもいいことなんだろな。

＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
友よ、おはよう！
＞ｂｒ＜
「ああ、おはようさん。いつもいつもギリギリだな」
＞ｂｒ＜
　まあ、まあ。間に合ってるんだから問題はないだろ？
＞ｂｒ＜
「それもそうだな。　まあ、翔が遅刻する姿は逆に想像できないしな。」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　この友の名前は又川（またがわ）　彰（あきら）といって、小学生時代からの友だ。もう一人の友と妹も入れて当時から４人で過ごしてきた。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
キンコーンカンコーン
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ＳＨＲ開始の鐘と共にサッチー先生が入ってきた。先生については特に語ることなく普通に良い先生だ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ｐ．ｍ．１２：３０
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　昼休みだ。学生が学校に来る目的の三割がこの時間の為だろう。
＞ｂｒ＜
少なくとも俺はそうだ。授業？　何の変化も無いものを描写しても仕方がないだろ。

「お兄ーちゃーん！」

　妹がもう一人の友を伴って昼飯の誘いに来た。もう一人の友の名は佐々木（ささき）　美菜（みな）だ。

　長めの髪を今時珍しい三編みにして後ろに流し、大きめな眼鏡を掛けている。控え目にいって結構かわいい。

彰の時の紹介より長いって？　逆に聞くが男性の描写を長くしたって楽しくないだろ？

つまりはそういうことだ。追伸として彼女も妹が運営する占い部の一員だ。

「翔、行くぞ、屋上へ！」

　友、彰よ。なぜそんなにテンションが高いんだ？　こら、手を掴むな！　引きずるなー！

「あー！！　翔君！　待ちなさい！」

「あっ！　お兄ちゃん。待ってー！」

＞ｂｒ＜

　後ろで、妹と友、美菜が何か叫んでいるが、どんどん引き離されて、聞こえない。というか友、彰よ。

＞ｂｒ＜

俺を引きずってなんでそんなにスピードが出るんだ？　心底、不思議なんだが。

＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜

　ここは屋上だ。どうでもいいことだが生徒は、入れないことになっている。

＞ｂｒ＜

が、占い部二人組は普通に職員室から鍵を借りてくる。相変わらず謎な部活だな。

＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜

「翔、弁当を頼む。」

＞ｂｒ＜

「お兄ちゃん、お弁当は？」

＞ｂｒ＜

「翔君、昼御飯を出して。」

＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜

　君達、さもそれが当たり前のように言うんだな。俺達の中ではなぜか俺が弁当を作ってくることになっている。

＞ｂｒ＜

俺は俺の気付かないうちにこいつらの弁当係にされていた。いや、このメンバーの中で料理がまともに出来るのは俺だけなんだが。

＞ｂｒ＜

＞ｂｒ＜

「「「お弁当口！」」」
＞ｂｒ＜
ええい、喧しい、この欠食児童ども！　準備するから少し待っとれ！
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
話すと長くなるから昼休み中の出来事は省略だ。いつも道理、ある意味密度の濃い時間だったとだけ言っておこう。
＞ｂｒ＜
ついでに言っておくと俺はあいつらに弁当を作って行くのはこれでも結構好きだぞ？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
学校にいる間は何の異常もなかったな。やはり問題は放課後か。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
それにしても、綺麗に毛繕いが出来たな。鏡か何かでちゃんと身だしなみが整っているか確認したいところだ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
放課後、それは一日の締めくくり。俺は特に部活に所属していないので、部活をやっていく友達と妹と別れ、家路につくことにした。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
コッチ、コッチダヨ。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
何か、此方に行くと良いことがあるような気がする！　その頃に

は、妹の朝の忠告のことなどスッカリと頭から抜けていた。
>br<
今、思うんだがきちんと覚えておけばよかった。
>br<
>br<
　ワタクシハ、ココニイルヨ
>br<
>br<
　ここは稲荷神社か？　はて俺はなぜここに来たんだろうか？　さっきまでは凄く良いことがあるような気がしたんだがな。
>br<
>br<
　ココダヨ　ハヤクアイニキテ
>br<
>br<
　む！？　あっちか、あっちなんだな！　待ってろよ、俺の良いこと！
>br<
>br<
　ここのはずなんだがなぁ。何もないな。
>br<
>br<
>br<
　ワタクシハココ、ワタクシハココ、ワタクシハココ、…キヅイテクレナイ、ナラバ
>br<
>br<
>br<
　おいおい、なんだこれ？　なんだこのポッカリと開いた闇は！
明らかに不味いものだろ。

＞br＜
＞br＜
ワ
＞br＜
タ
＞br＜
ク
＞br＜
シ
＞br＜
ノ
＞br＜
ト
＞br＜
コ
＞br＜
ロ
＞br＜
ニ
＞br＜
キ
＞br＜
テ
＞br＜
＞br＜
ヤバい！　闇がコッチに向かってくる！　不味い
＞br＜
＞br＜
に げ ら れ な い。
＞br＜

＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　そこで俺の意識は途絶えたんだ。って原因は明らかだよな。
＞ｂｒ＜
…もう現実逃避は止めにするか。さあ、せーの！
「コーーーーーーン！！！（なんじゃあこりゃあーーー！！！）」

第一尾　再誕運命（後書き）

お待たせ致しました。第一尾漸く完成です。
＞ｂｒ＜
遅くなって申し訳ないです。遅くなりついでの宣伝。
＞ｂｒ＜
この度私はホームページを持つことになりました。
＞ｂｒ＜
ホームページ名は
ＡＧＡＩＮＳＴＳＨＯＴ
です。
＞ｂｒ＜
ブログは
風向くままの野鳥（携帯）
です。

第二尾　確定自我

＞ｂｒ＜
　なんだこれ！？　尻尾が三本もあるキツネになってる！？
＞ｂｒ＜
　俺は自分の現状を目の当たりにして混乱し、闇に飲まれたと思われるところで尻尾を追いかけてぐるぐる回っていた。
＞ｂｒ＜
端からみてたら、さぞ微笑ましい光景だっただろう。俺も客観的に見れてたらそう思ってたな。
＞ｂｒ＜
思わず抱きついてたかもしれん。幸か不幸か周りには誰もいなかったがな。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　混乱も少し落ち着いてきた所で（実際には混乱しっぱなしだったが無理矢理落ち着かせたことにする）俺の状態を再確認してみることにした。
＞ｂｒ＜
……艶々していて金色に近い綺麗な毛並み、先っぽが黒っぽいふわふわしている三本の尻尾、此方も先っぽがくろい耳、プニプニしてそうな　にくきゅう、おなかのけはしょじょせつのようなしろ、はなもさきがくろい、……間違いなくキツネだな。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ああ、お花畑が見えるぞ。死んだ祖父母が手招きしている。
＞ｂｒ＜
え？　なんだって？　まだまだこっちに来るなって？
＞ｂｒ＜

アハハハ。祖父母よ、冷たいことを言わないでくれ。
＞ｂｒ＜
と俺は苦笑いしながら祖父母に近づいた。ほら、お土産も持ってきたぞ。
＞ｂｒ＜
紹介しよう、キツネの　たまよ　だ。　たまよ、挨拶して。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「コーーン！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　よしよし、可愛いな。祖父母よ、たまよに免じてこの場に居続けてもいいだろ？
＞ｂｒ＜
さっさと帰れって？　ひどいな、祖父母よ。
＞ｂｒ＜
　おや？　何を構えてるんだ？　そんなハンマーみたいな物で殴られたら死んでしまうぞ！
＞ｂｒ＜
ここは死後の世界だから死なないって？　ちょっ！　なにをする止め……
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ハッ！　俺は一体何をしていたんだ？
＞ｂｒ＜
まあ、いいか。それにしても俺がこうなったのはどう考えてもあの闇が原因だな。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜

あの時はここら辺で凄く良いことがあるような気がしたんだがな。
今思うとなんであんなに熱に浮かされたように何かを求めたのかさっぱり分からん。
＞ｂｒ＜
考えたくないが、こうなったのには俺も原因があるな。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
ああ、これからどうするか。ここでこうしていたらどんどんネガティブな考えに支配されてくな。
＞ｂｒ＜
俺がこんな姿になって誰が今までの俺だと保証出来る？　数十分前までの俺の記憶を持った誰かである可能性は？
＞ｂｒ＜
酒落にならん。姿と記憶が連結していないだけでこんなに不安になるとは！
＞ｂｒ＜
本当に俺は咲原　翔なのか？　ああ、どんどんドツボに嵌まっていく。
＞ｂｒ＜
泣いていいか？　そもそも俺が咲原　翔だとしてもこんな姿になって、声も
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「コーーーン！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
と鳴くことぐらいしか出来ないのに家族や友人に俺の事を分かってもらえないことは確かだ。
＞ｂｒ＜
自身が今の自分を疑ってるのにどうして他者に証明することが出来

るんだ？
＞ｂｒ＜
正直に言って俺には無理だ。ハァと思わずため息をつき、自分の状況を憂いた。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　ダイジョウブ、ドンナスガタ二ナッテモ、キミハキミダヨ、ダカラシンパイシナイデ
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　……そう、そうだよな！　らしくないことを考え込んでしまった。
＞ｂｒ＜
そう、何が起ころうと例えキツネになろうと俺は俺だ！　例え誰に疑われようと、俺が俺であることには違いない。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　まずは家に帰って家族と何とかしてコミュニケーションをとらないと。最悪、コミュニケーションが取れなかった場合、家のペットになるように頑張るか？
＞ｂｒ＜
可愛いキツネだ、さぞや癒しになるだろうな。取り敢えずの決心を固め、俺は家に向かってその四本の足で駆けていった。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　例がないので分からないが、今まで人間だった存在がいきなり四本足で歩く動物になっていきなり体のバランスを崩さず思うままに走れるものだろうか？
＞ｂｒ＜
だが、俺は実際の所、車のスピードを超える速さで地面スレスレを走っている。よし、俺は風になるぞ！

＞ｂｒ＜
もっと速く、もっと速く！　もはや、有り得ないような速さで俺は家に着いた。
＞ｂｒ＜
　ああ、気持ち良かったなぁ！
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　さて、俺の家だが、一般的な住宅街にある、極普通の家だ。なんの特徴も無さすぎて周りの家に埋もれている感じがある。
＞ｂｒ＜
だが、それでも１７年間暮らしていた我が家である為、かなりの愛着はあるがな。
＞ｂｒ＜
……どうするか？　インターホンなんてこの姿じゃあ届かないしな。
＞ｂｒ＜
　何も考えてなかった。いや、家に帰れば上手く行くと思ったのに。
……取り敢えず、鳴いてみようか？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「コーーーン！　コーーーン！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　遠吠えみたく、俺がなき続けていると家のドアが開き、……妹が出てきた。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「コーーーン！　（妹よ、只今！）　コーーーン！　（お兄ちゃんが帰って来たぞ！）」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜

通じないのは分かっているが思わず俺はそう話しかけていた。帰ったときの挨拶は基本だからな！
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
妹は俺の姿を見つけるなり、俺の事を優しく、壊れ物を扱うかのように抱き上げて、満面の笑みを称えながら、予想外なことを言った。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「お帰りなさい、お兄ちゃん！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
確かにその時、時が止まったような感じがしたね。
＞ｂｒ＜
え？　マジで？　なんで分かったんだ？？
＞ｂｒ＜
俺が妹の言葉に混乱している間に妹は俺を連れて家に入った……。

第二尾　確定自我（後書き）

お久しぶり、M．Aです。何とか更新できましたがカテゴリーに出てくる性転換要素がまだ発覚してません。あれれ？
＞ｂｒ＜
次かその次には分かる予定なのでお楽しみに！
ちなみにM．Aは携帯サイトを立ち上げました。興味のある方は是非、見てください！
活動報告にリンクがあります。

第三尾　会議家族

＞ｂｒ＜
　所で時間的に十分くらいしか経ってないはずなのだが一年半程過ごした間隔が有るんだが、……まぁ気のせいだろう。
＞ｂｒ＜
うむ、気のせい、気のせい。気にしな～い、気にしな～い。　＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
グルグルグルー↑肉球付きの前足を回してる音
＞ｂｒ＜
　自　己　暗　示　完　了　☆ミ
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　さて、今の状況なのだが、……何で俺は妹の膝の上に乗せられてるんだろうね？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「未来が乗せたからだよ！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　……何で俺は、妹に狐耳の先から三本ある尻尾の先っちょまで撫でられてるんだろうね？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「未来が撫でたかったからだよ！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
……もっと、撫でれ。……何で、俺は、妹と自然にコミュニ

ケーションが取れてるんだろうね？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「お兄ちゃんの事で分からない事なんてないからだよ！！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
！！！お兄ちゃんは感動した！　お礼に手を舐めてあげよう。
＞ｂｒ＜
ん？　特に変な意図なんてないぞ。今、俺は狐だからな。って誰に向かって言い訳してるんだろうな？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「兄妹仲が良好なのは分かりましたから、そろそろ話をしてもいいですか？」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
今の現状なのだが、家族はリビングに集まってソファに座っている。妹の膝の上に俺、机を挟んで正面に父、その左隣に母といった感じだ。
＞ｂｒ＜
家族全員特に説明も無く、俺を俺と認識していたようだが、うむ、家族の絆は強いってことか！
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「どうして、そんな状況になってるか一応説明してね」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
母よ、実は……
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜

>ｂｒ<
>ｂｒ<
　というわけなんだ。
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「……やはり、そういう事ですか」
>ｂｒ<
「……弊害が今出てしまったわけね」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　父と母がボソッと何事かを呟いて、二人とも全身を脱力させた。
おーい、二人で納得してないで説明を……と父と母に説明を求めよ
うとした所、我が妹が突然耳の中を指でくすぐってきた！
>ｂｒ<
っておい！　くすぐったいって！　！！！！！！？？
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「キューーーーン！」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　ハァ、ハァ、あれ？　何しようとしてたっけ？
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「ん？　お兄ちゃんが未来にもっと撫でて欲しいって話じゃなかっ
たっけ？」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　そうだっけ？　じゃあ、もっと撫でれ。俺はふわふわした尻尾を
三本ともご機嫌に振りながら催促してみる。
>ｂｒ<

＞ｂｒ＜
「もう、仕方ないなぁ～♪　うりうりうり～～」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　わぁ～！　妹が撫でている間、父と母が何やら深刻に話しているのも知らず、俺は妹に撫でられ喜んでいた。
＞ｂｒ＜
恐るべし、動物の本能！　父と母がある程度話終わったのか、父が咳払いをしてそちらに注目を集めた。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「翔君、それで、これからどうします？」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　どう、しましょうね～。俺、只の狐ですから。
＞ｂｒ＜
……家で飼われてニート生活？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「それも選択肢の一つよね」
＞ｂｒ＜
「お兄ちゃんの事は未来が一生面倒見てあげるよ～」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　！！？　選択肢にいれていいの！？　というか妹よ、何か危ない事を言ってるような……
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「今の翔君は結構上級階位にある妖狐のようですからね。人化して変化を使えば、今まで通りの生活も出来ますよ」

＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
妖狐？　人化？　変化？　また、そんな漫画みたいな……
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
『……アッハッハッハ……ｈａｈａｈａ』
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
……マジで！
＞ｂｒ＜
「ええ、マジです。第一、今の翔君の状況はまさしく漫画のような状況でしょう？」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
確かに。いや、しかし、それにしても、何で父はそんな妖狐やら何やら知っているんだ？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「それは……」
＞ｂｒ＜
それは？
＞ｂｒ＜
「咲原が陰陽師の大家だからよ」
＞ｂｒ＜
父が勿体ぶってる間にナチュラルに母が答えた。あ、ちょっと父が、しょんぼりしてる。
＞ｂｒ＜
前言撤回。すごく父がしょんぼりしてる。……陰陽師？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜

「……ええ、平安の世から続く大家で……」
>ｂｒ<
「話が長くなるから、要点だけ言うと悪い妖を昔から退治してきたって覚えて貰えれば、大丈夫よ」
>ｂｒ<
「……」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　母よ、父に何か恨みでもあるのか？　父が、すごーく、すご～～く落ち込んでるぞ？
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「……いえ、いいんです、翔君。また、いつか詳しく話す機会もあるでしょう。それで、どちらの選択肢を選びますか？」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　だからニート生活は選択肢でないと思うんだが……
>ｂｒ<
>ｂｒ<
「もちろん、お兄ちゃんはニート生活だよね？」
>ｂｒ<
>ｂｒ<
　え？
>ｂｒ<
「ね？」
>ｂｒ<
　ゑ？
>ｂｒ<
「ねぇ？」
>ｂｒ<

＞ｂｒ＜
　いやいやいやいやいや！　その選択肢なら変化とやら覚えていつもどうりの生活を選ぶって！
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「ちっ！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　可愛い舌打ちだな、おい。とにもかくもいつも通りの生活をしたいなと考えてる次第です。
＞ｂｒ＜
で、人化や変化とやらはどうやったら出来るんだ？
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「……気合いです」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　今、なんと？　気のせいじゃなかったら気合いと聞こえたような……
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「気合いです！　全ては気合いでなんとかなりま、……グェ！」
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
　母？　母よ、父の首が締まってますよ？　あ、落ちた。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「初級の妖術、あっ、妖が使う技のことね。なら、イメージを明確にすればいいの。妖狐なら、人化は呼吸をするように出来るはずだしね」

＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
そ、そうか。　父を締め落とした後、何もなかったかのように母は話した。
＞ｂｒ＜
妹の撫でる手もどことなく強張っているような気がする。
＞ｂｒ＜
＞ｂｒ＜
「未来、翔を連れてあなたの部屋で人化の練習をさせてあげてね」
＞ｂｒ＜
『ハイ！』
＞ｂｒ＜
俺と妹はいいお返事をして二階の妹の部屋に向かって行った……。

第三尾　会議家族（後書き）

感想を見て、続きを希望してくれたアナタの為に書きました。遅れて、本当に申し訳ありませんでした！

お知らせ

＞ｂｒ＜
　半年ぶり、Ｍ．Ａです。未だに心のどこかに残っていると嬉しいのですが……
＞ｂｒ＜
全話改訂を完了しました。多分、今までより１０％（当社比）は比較的読みやすくなっているはずです。
＞ｂｒ＜
そして改訂後の今、新しい話も一生懸命書いているところです。
＞ｂｒ＜
　あとＭ．Ａは、ブログ
風向くままの野鳥
をオープンしました。
活動報告にリンクがありますので良かったら見てあげて下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7265e/

キツネ！パラダイス☆ミ

2010年10月14日12時05分発行